

□ 声 楽

國 土 潤 一

2021年も新型コロナウイルス（COVID-19）に翻弄された一年であった。度重なる緊急事態宣言による行動規制が行われる一方で、ワクチン接種の浸透により、重症化リスクは軽減して行く傾向も見られたが、デルタ株から年末にはオミクロン株といった変異株の出現によって、先行きは未だ見えていない。飛沫感染が主たる原因であるこの感染症の中で、口を開けて声を出す「声楽」の分野は、ずっと最前線の危機感を持って認識された。音楽と「不要不急」の関係について、考え直すことも当たり前になった。その外的・内的葛藤の中で、様々な認識・意識を抱いて多くの演奏家がそれぞれの活動を慎重かつ勇気をもって展開した。「非日常」の日々が、我々にとっての「音楽」の意味と意義を再認識する一年であった。

ここでまた毎年の言い訳だが、多くの声楽関係の演奏会があった中で、筆者が聴けたものは余りに限られているし、紙面も限られておりその総てに論述することは出来ない。そのことをご理解頂いて拙文をお読み頂きたい。

1月13日には、メツォの波多野睦美が高橋悠治のピアノで彩の国さいたま芸術劇場で行ったリサイタルを聴く。これは林田直樹のナビゲーションでお話を交えながらの平日11時に開演する「イレブン・クラシックス」シリーズの一貫。新国立劇場なども含め平日のマチネ公演が近年は増えている。これは、リタイア世代の聴衆をターゲットとした試みだろうか？プログラムは前半がシューベルトの作品、後半は「詩と音楽～シェイクスピアの周辺」と題した古楽と20世紀音楽で構成されたもの。マチネのお話付き演奏会と言ってもプログラムはマニアックな内容で、ある意味聴衆の成熟が無ければ出来ないプログラムだろう。

2月16日には、東京オペラシティの若手音楽家のリサイタルシリーズ「B→C（バッハからコンテンポラリー）」に、ソプラノの藤井玲南が登場した（ピアノは本山乃弘）。初めて接した藤井の歌唱では、21世紀の歌手に相応しいインテリジェンスと技術が聴かれた。このシリーズらしい挑戦的なプログラミングで、今後に注目したい。

3月13日にトッパン・ホールでソプラノの嘉目真木子が北村朋幹のピアノで行なったリサイタルは、ベッリーニ、ラロ、クイルター、マルティヌー、オブラドルス、グリーグ、シマノフスキ、チャイコフスキーという8カ国の作曲家の歌曲を配列したマルチリンガル・プログラム。原語と向き合わなければならない声楽家の宿命を逆手に取った挑戦に拍手。

4月23日には豊洲シビックセンターホールで大ベテランのバリトン、川村英司が「卒寿記念」と題してのリサイタルを行なった。ピアノは長く共演している小林道夫。卒寿と記してあったが、2020年に予定していたリサイタルが「コロナ禍」で1年延期されたので、90歳の誕生日直前の開催となった。ピアノの小林と年齢を合計したら、声楽家のリサイタルとしてはギネス級かもしれない。シューベルト、シューマン、ブラームス、ヴォルフという川村の声楽家人生と共にあった作曲家の作品を、「古い」をほとんど感じさせない声で歌った。この「声の維持」

は、後進への範ともなろう。「人生100年」の長寿時代を象徴するリサイタルだ。

5月16日にはサントリーホール・ブルーローズでの「二期会デイズ」で、『ブラームス・ワルツ集「2つの愛の歌」』と題した演奏会が開かれた。ソプラノの佐々木典子、メツォの加納悦子、テノールの松原友、バリトンの小森輝彦、ピアノの小林道夫と井出徳彦がタイトルのブラームスの「愛の歌」と「新・愛の歌」の四重唱集をメインに、ブラームスの独唱歌曲を歌った。声楽家としてのルーツを異にする4人に、全く音楽性も世代も異なる2人のピアニスト。しかも「コロナ禍」でどれだけ一緒に練習が出来たのか？一条乱れぬ演奏とは対極の演奏であったが、名手の即興的とも呼べるようなある種のミスマッチの妙が聴かれた。それも多重唱の面白さの別の側面であった。独唱ではドイツ・リート第一人者、加納の「ジプシーの歌」抜粋が圧巻の歌唱。

緊急事態宣言が解除された頃からは、声楽市場も活気を取り戻してきた。

10月15日にトーキョーコンサート・ラボでの山田流箏曲の下野戸亜弓の「現代箏曲の世界」を聴く。下野戸の作品の改訂初演以外は、権代敦彦、桑原ゆう、高橋悠治への委嘱作品の初演というプログラムで、総てが歌のための作品。下野戸の歌は、所謂「邦楽」という我々洋楽の人間が抱く固定観念を完全に覆すもので、筆者はかねてから注目している。その邦楽側からの「美しい声による美しい歌」は、日本歌曲の世界に大きな刺激を与えるだろうし、学ぶべきものは多い。日本歌曲の学習のために邦楽を学ぶという声楽家がしばしば陥る短絡的な思考とは異なる下野戸の模索している歌の在り方は、邦楽と洋楽の垣根を取り払う突破口の可能性を秘めている。

10月17日には、ソプラノの高橋維が王子ホールでリサイタルを開いた。これは五島記念文化賞オペラ新人賞研修成果発表会としてのもので、多田聡子のピアノに、尾田下哲の監修。近年オペラ・シーンで頭角を顕してきた高橋の様々な可能性を感じさせてくれる意欲的なものとなった。レジーネのコロラトゥーラ・ソプラノとしての高橋は、声量で聴き手を圧倒する歌手ではない。確かな音楽性と技術を駆使して芸術性の高い歌を聴かせて行くべきその道が、声楽の市場でいたずらに消費されず、堅実で実りあるものになることを願ってやまない。

文化庁の「令和3年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」の一環でメツォの成田伊美が、高木由雅のピアノで10月27日に東京文化会館（小）でリサイタルを開いた。ヴォルフ、ドビュッシー、R.シュトラウス、ワーグナーという堂々たるプログラムで、その声の素材の良さと素直な音楽性で、伸び伸びとした歌を聴かせた。この「優等生の殻」を如何に破るかが、成田だけではなく多くの若手の前に立ちはだかる壁であろう。それを助ける音楽社会でありたいと願うのだが。

10月28日には東京文化会館（小）で日本歌曲協会の「邦楽器とともに」が催された。「誕生百年！十七絃の響きにのせてⅢ」と題した16回目の今回は、十七絃箏と歌の組み合わせの作品の数々が産声を上げた。このような地道な作品の創出と模索は、「日本の新しい文化の創出」の為に大きな意義を持つ。勿論、歴史に残る作品がどれだけあるかは「出来高」次第である。時には徒勞に終わる可能性もある。しかし、このような営々たる努力の積み重ねが音楽史を作ってきたのだ。邦楽側からも深慮さとみや下野戸亜弓ら実力者の参加もあるのは頼もしい。